

20200112

少し前の話になるが、正月休みの間に、自分の専門とはまるで関わらず、かつ相互に接点のほとんどない本を二冊読んだ。

①野間秀樹『言語存在論』（東京大学出版会、2018年）。

②芝崎祐典『権力と音楽——アメリカ占領軍政府とドイツ音楽の「復興」』（吉田書店、2019年）。

①は重厚かつ高度な専門書で、かなり難解な個所もあり、十分理解できたとは言えないが、若い頃から言語学に素人流関心をいただき続けてきた私としては、あちこちで刺激されたり、目を瞠らせられる思いをした。「ことばは意味を持たない。それは意味と〈なる〉のである」というテーゼはいろんなことを考えさせる。欧米諸語、ロシア語、韓国語（これが著者の最大の専門らしい）、日本語を縦横に並べ、古典的な文章、日常的な会話のことば、最新のデジタル・テキストといった幅広い対象を取りあげながら、そこに一本の筋を通そうとするのは相当の力業だと感じた。

②はこれよりもずっと読みやすい。副題に示されるように、戦後初期（冷戦最初期）ドイツにおける米軍占領地域での音楽政策を取り扱っている。基本的には国際政治史の本だが、有名な音楽家たちの名前がたくさん出てくるので、音楽ファンにとっても楽しく読める。ソ連占領地域での音楽政策との対抗という問題が触れられているのも面白いが、ところどころで、これでいいのかなという小さな疑問を覚えないではない。といっても、私自身その方面にとりたてて知識を持っているわけではないので、あくまでも軽い疑問にとどまる。もしその方面でのきちんとした研究があるなら、それとこの著作をつきあわせることで、より複合的な像を得ることができるだろう。

とにかく、この二冊の書物はずいぶんとかけ離れた分野に属するが、そうした本を続けて読むことで、普段あまり使わない脳の部分をかき回して、頭の体操をすることができた。正月休みを切り上げた後は、本来の仕事——それも、できればこれまでの単純な延長上ではない新しい仕事——に取りかかることにしよう。

20200113

昨日の書き込みへの追加。芝崎祐典『権力と音楽』で一つ面白かった点として、当時の多くのアメリカ人は「ドイツ音楽は高尚だが、アメリカ音楽は低俗だ」というコンプレックスをいだいていたらしいことが窺える。そのため、音楽の「非ナチ化」といっても、せいぜいメンデルスゾーンのようなユダヤ人作曲家を復活させる程度にとどまり、ナチ期に盛んに演奏されていたドイツ音楽の大半は多少の躊躇はあってもすみやかに再演されるようになったようだ。アメリカ文化をドイツに持ち込むという観点からはジャズがすぐに思い浮かぶが、ジャズはドイツ人から軽蔑されるのではないかという懸念があって、あまり積極的に演奏あるいは放送されなかったという。後にドイツをはじめ世界各地にジャズが進出し、アメリカの文化的覇権の一環をなすようになる——そして、かつてジャズがかなり流行っていたソ連では、冷戦進展の中でジャズが異端視されるようになる——という経緯を思い出すなら、戦争直後とその後の時期の違いの大きさが強く印象づけられる。他方、ロシア音楽はもちろんドイツ音楽とは違うが、それでもある程度近いところがあり、ソ連占領地区ではベートーヴェンやブラームスとチャイコフスキーの組み合わせといった感じ

のプログラムの演奏会が盛んに開かれ、これはアメリカから見ると羨ましいことだったらしい（コープランドではチャイコフスキーにかなわない）。

ここから先は私が勝手に考えたことだが、日本を占領した米軍はジャズを日本人に広めることを躊躇わなかったようだし、浪花節に代表される伝統的邦楽は「封建的メンタリティ」のあらわれとして蔑視していたのではないか。だとすると、当時の価値序列として、ドイツ音楽＞ロシア音楽＞アメリカ音楽＞日本の邦楽といったヒエラルヒーがあったことになる。こうした発想は今日では馬鹿馬鹿しいものと感じられるが、当時はかなりの程度広く分かちもたれていたのかもしれない（おそらく丸山眞男も、ドイツ音楽のなかに「西欧精神」を聴き、アメリカ軽音楽に「ブルジョア的退廃」を、邦楽に「封建的メンタリティ」を聴いていたのではないか）。

20200124

一昨日は清水靖久『丸山眞男と戦後民主主義』をめぐる読書会に出てきた（主催団体たる戦後研究会がどういう会なのか、あまりよく知らないが、とにかく松井隆志氏から教えていただいた）。この会は著者を必ず招くという原則をとってはいないとのことだったが、今回は著者がわざわざ福岡からやって来ていた。びっくりしたのは、丸山彰氏（眞男の長男）が出席していたこと。その他、フランス史の加藤晴康氏をはじめ、私の知人も何人かいたが、いずれも「こういう場でこの人と会おうとは」という意外感があった。私とまるきり接点のない人も多く、全体として雑多というか多彩というか、とにかくヴァラエティに富んだ会だった。構成が多様なだけでなく、発言者たちの問題意識もまちまちであり、議論はあまり噛み合わなかったが、多種多様な人たちが多種多様な感想や意見を述べたくなるのが丸山の丸山たるゆえんということかもしれない。研究会からその後の懇親会にかけて長時間にわたって雑多な情報や意見が飛び交い、頭の中がワンワンというような感じになったが、これからゆっくりと反芻してみることにしよう。

20200128

一昨日は、「ジェノサイドと奴隷制を考えるブレイン・ストーミング」という催しに行ってきた（会場は明治大学駿河台キャンパス）。この研究会は西成彦氏を中心になって推進しているもので、この日の会は、同氏の立命館大学定年退職記念という意味があったようだ。私は西氏のことは長らく名前を知っているだけでそれ以上の縁はなかったのだが、ここ数年、いろんなきっかけで思わぬ縁ができ、専門や直接的テーマの差を超えて多くの知的刺激を受けるようになったので、この会にも部外者として顔を出させていただくことにした。

当日は二部構成で、第一部は村田はるせ氏の「ルワンダ・ジェノサイド後の社会を書く：『神（イマーナ）の影』の語り手の旅より」という報告。ルワンダ・ジェノサイド（1994年）の経緯については、日本では武内進一氏の研究である程度のこと知られている。村田報告はそうした史実を踏まえた上で、タジョという作家（コートジヴォワール出身の女性）の作品を紹介して、文学の立場からの問題提起を行なった。この作品は多くの人々へのインタビューをまとめたものという点でアレクシエーヴィチの作品を思い起こさせるところがある（私も聞いていてそう感じたし、当日、他の何人かも同じ感想を洩らしていた）。

もともと、アレクシエーヴィチと違って、タジヨは自分の聞いた証言を読者のために手を加え、書き換えたとのことで、ノンフィクションならぬフィクションの要素を含んでいるようだが、そうした性格の文学作品によって読者の想像力を喚起し、自らは語ることでできない人たち（サバルタン）の複雑な思いを伝えようとしたらしい。そういう手法をとることの意義、アフリカの作家がフランス語で小説を書いて主に西欧の読者に訴えることの意味、その他いろいろな論点が出て、活発な討論となった。

第2部は西成彦氏の一稿の最終講義で、「戦争論再考：ジェノサイドの連鎖にストップをかけるために」と題され、西谷修氏との討論がそれに続いた。西氏の基本的な問題意識は、戦争という形を取らない各種残虐行為に幅広く注目し、「反戦」というスローガンに集約されない事象を取り込むために「ジェノサイド」の語を戦略的に使用するということにあるようだ。その狙い自体はよく分かるし、共感もするのだが、そのために「ジェノサイド」の語を使うのが最適かという点には疑問があり、当日、私だけでなく佐原徹哉氏その他何人かから疑義が提出された。西氏のリプライは、ジェノサイドという言葉が歴史問題への司法の過剰介入の文脈で使われる面は確かにあるが、自分はそれとは一線を画した上でこの言葉を使うとのことだった。

「司法の過剰介入」ないし「歴史の司法化」という問題は韓国における朴裕河さんをめぐる状況とも関わるもので、ちょうどこの前日に早稲田大学で開かれたシンポジウム（私自身は欠席）でもこの問題が議論されたようだ。西氏は朴さんの『帝国の慰安婦』をめぐる論争にも関与していて、『対話のために』という論集の共編著者の一人でもある（私が西氏とはじめて出会ったのも、この論集に関わるシンポジウムにおいてだった）。そうした縁もあって、朴さんは前日の早稲田の集会に続いてこの日の明治大学の会にも来ていた。こうした一連の問題状況に関しては私は西氏の議論に共感するところが大きく、その意味ではあまり隔たっていないのだが、それを「ジェノサイド」という語に集約するかどうかで微妙な食い違いがあるように感じた。

西氏の議論でもう一つ注目し値するのは、残虐な事件の被害者（犠牲者）に共感するのはある意味で容易なことだが、それだけでなく、加害者や傍観者のうちにも自分と同じものがあるのではないかということを見つめる必要があるという問題提起があった。これも私としては大いに共感する。もともと、それを「イデオロギー」という概念と結びつけて整理すると、また別種の安易な図式化になってしまわないかという懸念もなくはない。「イデオロギー」というと何か特別な政治的あるいは宗教的立場を連想し、特定のイデオロギーに「悪」を帰する発想になりやすい。だが、どのようなイデオロギーに立つかに関わりなく、われわれ（私やあなた）が加害者や傍観者になってしまう可能性がありはしないかという点にこそ、最も深刻な問題があるように思う。そうしたことを私が考えるようになったこと自体、西氏の問題提起のおかげであり（2018年11月に名古屋で開かれたシンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶：ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」での報告による）、その意味での恩恵は大きい。

文学研究と歴史研究とは、ところどころで交錯するものを持ちながらも、異なった発想で仕事を進めるため、きちんとした対話を交わすのはなかなか難しい。私はこれまで亀山郁夫・沼野充義・沼野恭子といった各氏との交流の中でその面白さと難しさを痛感していたが、西氏との交流はまたもう一つの可能性を開いてくれたように思う。

【後記】この日に会って立ち話を交わした平凡社の松井純氏は、その数週間後に 52 歳の若さで急逝した。あまりの突然さに言葉も出ない。

20200204

三宅芳夫『ファシズムと冷戦のはざままで——戦後思想の胎動と形成、1930-1960』（東京大学出版会、2019年）という本を読んだ。

ユーラシアの両端に位置するフランスと日本の知識人たちの 1930 年代から戦後初期にかけての様々な作品を取りあげて分析した書物である。著者は哲学・思想の専門家のように、本書の書き方も、歴史的な脈を踏まえつつも基本的にはテキスト分析を中心としている。そのため、哲学にあまり通じていない読者にとってはそれほど読みやすい本ではない（政治学者を取りあげた第3部は比較的分かりやすい）。それでもこの本に惹かれたのは、本書に登場する大勢の人たちのうち、フランスのサルトル、カミュ、メルロー＝ポンティ、日本の三木清、竹内好、武田泰淳、渡辺一夫、丸山眞男といった名前が私の青春時代とも結びついていて、懐かしさをそそられたからである。やや抽象的な概念論に傾斜した議論が十分飲み込めたわけではないが、本書の一つの基調低音として、今や忘れられつつある「非共産党の左翼」の復権ということがあるように感じた。その問題意識には共感するが、ある種の疑問も浮かばないではない。ソ連・東欧諸国の社会主義崩壊は「正統派左翼」にとってのみならず「非共産党の左翼」にとっても試練だったのではないかと、そして多くはその試練に耐えなかったのではないかとということが私には気になる。著者はこの問題についてどう考えているのだろうか。

20200304

数日前に、『ソ連の解体：原因・状況・帰結に関する討論』（モスクワ・サンクトペテルブルク、2019年）という本が届いた。ソ連解体 25 周年に当たる 2016 年にロシア科学アカデミー・ロシア史研究所で行なわれた学術セミナーにおける報告をまとめたもの。ジュラヴリョフ（同研究所の副所長）の序文の大意を簡略にまとめると、次のようになる（直訳的な紹介ではなく、やや大胆にパラフレーズしたところがある）。多くのロシア人はソ連国家の消滅を残念に思っており、一時期広まったソヴェト期の全否定に代わって、「ソヴェト文明」への関心が高まっている。とはいえ、それは共産主義ノスタルジーやソ連再建論ではない。そうではなく、過去への客観的な取り組みが必要とされている。それを可能にするための資料的基礎は次第に充実してきた（アルヒーフ文書、定期行物、社会学的調査、回想等々）。そこには相互撞着するものもあるが、それらを資料批判する作業はまだ十分積み重ねられていない。近年の研究の焦点は、ソヴェト体制は改革可能だったのか、それとも打ち壊すほかなかったのかという点におかれている。本書は政治、経済、社会、対外関係という4つの角度からこの課題に迫る。マクロな構造だけでなく、工場、農村、子供たちといったミクロの視点を重視するのが一つの特徴である、云々。

序文に続く本文は、まだ部分的に読んだだけだが、一つ一つの論文はそれぞれ異なるテーマを扱っており、全体的な統一性がどのくらいあるのかは定かでない。全部で 220 頁という比較的薄い本であり、画期的な研究成果とはいえないのかもしれない。それにしても、ロシアの歴史家たちが、自国の近い過去に対して、かつて自分自身が参与した出来事とい

う感覚を保持しながらも、距離をおいた歴史的事象として、なるべく客観的に研究しようとする試みに取り組んでいるのは意味のあることであり、個々の論文の出来映えは別として、それなりに参考になるところがあるように思う。

20200308

『小尾俊人日誌 1965-1985』（中央公論社、2019年）という本を読んだ。小尾俊人（1922-2011年）はいうまでもなく、みすず書房の創業者で、長らく編集責任者をつとめた人である。戦後日本の学術出版に果たした役割の大きさはよく知られている。その小尾が没後に残した日誌は 1961-97 年の長期にわたっているが、その最大の部分をなしているのは 1965-85 年の時期の分だという。そして、この時期に小尾は丸山眞男・藤田省三の二人と密接に接し、両者の云うに云われぬ微妙な緊張関係を間近で観察するめぐりあわせとなった。本書は、日誌のうちのそうした記録の部分をまとめて書籍化したもの（丸山の二人の息子に触れた個所もある）。もっとも、日々見聞きしたこと短い記録が主なので、その背後にあったであろう人間ドラマについて十分詳しいことが分かるわけではない。かなり重要ではないかと思われる出来事や丸山その他の人の発言について断片的な記述がありながら、それ以上の説明がないために隔靴搔痒の思いをいだかされる個所も少なくない。それにしても、戦後日本社会科学史に関わる貴重な資料ではあるだろう。

20200312

コロナ・ウィルス問題については膨大な情報や意見・論評が飛び交っており、それらのうちどれが相対的に信頼できそうか、怪しそうかを見分けるのも容易ではない。未知の現象を相手にしている以上、それは自然なことだし、マスコミや SNS 上で玉石混淆の情報飛び交うのはこの問題に限られない。専門性の高い事柄について非専門家がどこまできちんとした理解をもつことが可能かというのは、より広い一般性をもつ問題かもしれない。私は政府の専門家会議がどういう風に構成されているのかよく知らないが、この間のニュースからの漠然とした印象として、この専門家会議と政府は必ずしもピッタリと密着してはいないのではないかという気がする。というのも、政府が打ち出した政策のなかには、全国の学校の一斉休校要請をはじめとして、非常に唐突で、専門家との協議なしに突然表明されたものがかなりあるように見えるからである。ということは、逆にいえば、専門家会議は政権中枢からそれほど明確な指示を受けているわけではなく、手探りで方針を模索してきたのではないだろうか。そこには種々の混乱や失策があったかもしれない（それはある程度まで不可避だろう）が、その全体を、政権の意を受けた「御用学者」による意図的な情報隠しという風に決めつける風潮が一部にあるのは、やや行き過ぎではないかという気がする。

よく問題とされる検査範囲の限定——希望者の全部ないし大半に検査を行なうのではなく、むしろ抑制気味に検査を実施するというもの——については賛否両論がある。私はこの方針に関する専門家たちの説明には、とりあえず相当の説得力があるように思う。もっとも、それは、限られた資源制約の下で、現在の諸条件を考慮して、優先順位をつけて検査をしていくということであって、「検査は全く不要だ」と「わざと検査を少なくする」ということではないはずである。ところが、そのように誤解して批判する向きもあるよう

だ。他方、検査をもっと拡大すべきだという主張のなかには、単純な感情論も少なくないが、より冷静な議論としては、諸条件をなるべく速く整備して、医療崩壊を回避しつつ、徐々に（しかしできるだけ急速に）拡大していくべきだという主張もあり、これは「とりあえずは抑制気味にするしかない」という立場と矛盾しないはずである。本来は相互矛盾せずに両立するはずの議論が極端化されて、相容れないかのように描き出されているようにも見える（ついであるが、検査範囲の問題と関連して、各国ごとに検査の方針が異なる以上、発見感染者数の国際比較はあまり意味がないだろう。もっとも、そのことを「日本はわざと検査を少なくして、発見感染数を小さく見せかけているのだ」という陰謀論的解釈に結びつけることができるかどうかは別問題である）。

とにかく、実態にせよ、これまでとられてきた方針の適否にせよ、にわかに判断しきれない要素がたくさんあるが、「政府・専門家一体となった情報隠し」といった陰謀論的な解釈はやはり行き過ぎで、無理があるように思う。ところが、今回の場合、日頃わりと冷静な感じの人たちも、その方向に傾いているケースがかなりあるのではないかという気がしてならない。他方、そうした陰謀論的な政権批判を快く思わない保守系の論客からは、「何が何でも安倍政権の悪口を言いたがるサヨクの錯乱」といった声が出ている。そう言われて仕方ない面もあるように思うが、それだけでも片付かないような気がする。

何よりも不幸なのは、今回の事態に先立つ数年の間に、政権にとって不都合な情報を隠蔽したり、誤魔化したりしているのではないかと疑われる出来事が相次ぎ、「この政権の言うことは何も信頼できない」という雰囲気広がっているなかで今回の事態が生じたということである。そういう背景があるために、それ自体としては殊更に勘ぐる必要のないことについてまでも、つい疑心暗鬼になってしまうということがあるのではないだろうか。2011年の3・11のことを思い出してみるなら、あのときは発足してからまだあまり時間の経っていなかった民主党が政権運営に慣れていなかった（そして自民党は「大連合」の呼びかけを蹴り、民主党政権を助けようとしなかった）ことが混乱拡大の一要因となった。とすると、2011年と今日とでは、自然災厄に由来する不幸を政治的要因が増幅したという点では共通するものの、その政治的要因の中身は大きく異なる——前回は政権運営への不慣れ、今回は長期政権に慣れすぎたことによる驕りと緩み——ということになるのかもしれない。幸福な家庭はどれも似たり寄ったりだが、不幸な家庭はそれぞれに不幸だというトルストイの言葉が思い出される。

20200324

一昨日、中央アジア学会大会の公開シンポジウムを Zoom によるオンライン会議で傍聴した。テーマは「途上国研究の最前線としての中央アジア」（雑誌『アジア経済』と共催）。最初に岡奈津子氏による趣旨説明があった後、4つの分野からそれぞれの報告があった。宇山智彦「比較政治学における中央アジア研究の成果・可能性・課題」。樋渡雅人「移行経済論と開発経済論の接点としての中央アジア地域研究」。熊倉潤「民族エリートと国民国家建設から見た中央アジア地域研究」。地田徹朗「環境と地理から見る中央アジア地域研究のあり方」。宇山報告は比較政治学という学問のかかえるジレンマの指摘から始まって、「民主化」論花盛りの時代から「権威主義的転回」へという流れの変化、中央アジア政治研究の試行錯

誤、そして今後の展望と課題を論じるもので、類似した問題意識をいただいていた私としては共感するところが大きかった。最後のあたりで、中央アジア政治研究の強みが弱みともなってしまうのは、地域研究側というよりもむしろ比較政治学側の問題ではないかと示唆された点が特に注意を引いた。

樋渡報告は経済学における移行経済論と開発経済論という二つの分野の接点に中央アジア経済研究が位置すると論じるもの。私は若い頃に社会主義経済論／比較経済体制論に関心を持っていた時期があり、それは開発経済論とも接点を持つようだと考えていたので、その頃のこと思い出しながら興味深く聞いた。

熊倉氏と地田氏はともに彼らが大学院時代からの長いつきあいで、それぞれの仕事ぶりをずっと追ってきたが、二人ともその研鑽をこのようにまとめているのだなと感じて感慨深かった。熊倉氏の近刊著作の表紙が画面に映し出されたのが目を引いた。地田氏が精力的に学際的共同研究に関わっているのも印象的だった（最後のあたりに「そろそろ大きな仕事にしないといけない」とあったのに期待したい）。

質疑応答では、中央アジアからの留学生二人が発言したのが注目を引いた。また、宇山氏と樋渡氏の「移行」概念をめぐるやりとりは特に興味深いもので、私も横合いから口を挟ませていただいた。樋渡氏は資本主義の複数性を指摘し、移行過程は単線的なものでないと強調した。私もその通りだと思うが、それにしても「何らかの型の資本主義に向かって、曲折をはらみつつ移行してきており、指令経済に戻ってはいない」という限りでは共通する。ということは、経済面に関する限り、「移行」概念は留保付きながらも成り立ちうるということの意味する。これに対し、政治面では、市場経済はリベラル・デモクラシーとも権威主義とも結びつくので、一義的な「移行」概念がそもそも成り立たない。（経済的意味での）移行の初期にはリベラル・デモクラシー化が喧伝されたが、やや長い目で見ればむしろ権威主義との結合が優位になってきている。そのような傾向は中央アジアで最も早くあらわれ、ウズベキスタンやトルクメニスタンはソ連解体に先立つ 1990-91 年頃から「権威主義的政治による上からの資本主義化」の道を歩み始めていたのではないか。

**【Zoom というものをはじめて使ってみた感想】。**

報告を聞く（報告者の顔だけでなく、レジュメやパワーポイントの画像も映し出された）という面では、全く問題なかった（私は机の上に 2 台のパソコンを並べて、一方で Zoom の画面を見ながら、他方でメモをとったり、他の関連資料を見たりしていた）。質疑応答も、マイクを適宜切り替えることで結構うまくいった。ただ、リアルな会議では他に何人ぐらいの人が手を挙げているのかが目に見えるので、「今は遠慮しておこう」とか、「誰も発言者がいないのなら、時間ふさぎに発言してもいいかな」などと考えるのだが、それができないのが歯がゆかった。こういうわけで、シンポジウム自体は予想以上にうまくいった気がするが、それとは別に、休憩時間とか懇親会とかの場でインフォーマルな意見交換をすることができなかつたのは残念だった。同様の感想は他の多くの人も感じたようで、今後の課題だろう。

20200328

本日、沼野充義氏の最終講義があった。本来なら公開講演という形をとるはずで、私もできれば出席したいと思っていたのだが、コロナ騒ぎのあおりで公開講演は取りやめとなり、

その代わり、最終講義の様子が Youtube で放映された（最初、ログインの方法が分からず、若干慌てたが、何とか開始直前につながった）。聞いているうちに、何となく彼とのつきあいの歴史を振り返ってみる気になり、イヤホンで講義を聴きながら、ぼつりぼつりと頭に浮かんだことを書き留めてみる。

私が沼野氏と初めて会ったのは、彼が東大教養学部教養学科に進学してきたときのことだから、もうかれこれ半世紀近くのつきあいということになる。もっとも、最初のうちは、駒場のロシア関係大学院生たちの大勢の集まりの中で軽く接するという域を超えず、比較的浅い縁だった。その数年後、私のコロンビア大学滞在の時期は、彼が恭子さんとともにハーヴァード大学にいた時期と一部重なっていたようだが、アメリカで会うことはなかった。ただ、後になって沼野夫妻がアメリカにおけるロシアといったテーマについて書いたものを読むと類似した経験を思い出し、「ああ、同じ時期にいたんだなあ」という感覚をいだかされた。

細く長く続いてきた交流が特に強まる契機となったのは、平凡社の『新版・ロシアを知る事典』編集時のことだった。この事典の旧版『ロシア・ソ連を知る事典』は川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹編だったが、大幅に改訂増補した新版の編集には沼野氏、栖原学氏（経済担当）と私の三人が当たった。このときの接触は相当濃密なもので、彼の見識がロシア・ポーランド文学以外の広い領域に及んでいることを知った。

その経験があったことから、私の在職中最後の大きな仕事として講座『ユーラシア世界』の構想を思いついたときに真っ先に彼に声をかけ、小松久男氏にも加わってもらって三人で共同作業を進めた。この講座の言い出しっぺは私だったとはいえ、その具体化の過程では沼野、小松両氏から豊富なアイデアを出してもらい、寄せ集めではない凝集力ある講座を作ることができたと感じているし、私も視野を大きく広げることができた。沼野、小松両氏はいわば私にとって戦友という気がする。

私の定年退職後、直接顔を会わせる機会はかなり減ったが、その代わり、フェイスブック上でのつきあいが深まった。彼の書き込みは文学関係はもとより、社会評論の領域にも及んでいて、今や日本を代表する知識人の一人となっているように感じる。

われわれの若かった時期に代表的だったロシア文学者といえば、江川卓、原卓也をはじめ多数の先達があったが、中でも抜きん出た位置にあったのが木村彰一だった。当時はかなりの「お年寄り」と見えた木村も、いま思えばまだ還暦前だった。ということは、いまや還暦をだいぶ過ぎた沼野氏は、当時の木村よりも年長になったということだ。かつて紅顔の美少年だった沼野氏がいまやかつての木村彰一の位置を占めるようになったことに感慨を覚える。

私は沼野氏の膨大な著作のほんの一部を読んだだけだが、『永遠の一駅手前』（作品社、1989年）、『スラヴの真空』（自由国民社、1993年）、『チェーホフ——七分の絶望と三分の希望』（講談社、2016年）あたりは特に強い印象が残っている。とりとめなく書き綴ってきたが、彼が今後も長く健康を維持して活躍し続けてもらいたいと切望する（最終講義が終わった後、Youtube のチャット機能なるものを使って質問を寄せることができるとのことで、実際、何人かの人が質問を寄せて、それに沼野氏が答えていたが、私にはチャットのやり方が分からず、ひたすら聞くだけだった。コロナに伴う蟄居生活が続く中で、こういう機能にも慣れていかないといけないのだろう）。